

山形・山形城跡

やまがたじょう

- 1 所在地 山形市霞城町かじょう
- 2 調査期間 一九九九年（平11）七月～一月
- 3 発掘機関 山形市教育委員会
- 4 調査担当者 五十嵐貴久
- 5 遺跡の種類 近世城郭跡
- 6 遺跡の年代 近世（一六世紀～一九世紀）
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（山形）

史跡山形城跡は山形県下の代表的な近世城郭である。その創建は斯波兼頼によるもので、延文元年（一三五六）にさかのぼる。斯波氏はこれ以来、古代よりの地名である最上氏を名乗り、戦国時代に至り、第一代最上義光の頃に最大五七万石の大名として近世大名の諸侯に連なるが、後に改易となる。その後は譜代大名がいく度となく交替で封じられるようになり、水野家

（五万石）の時、明治維新を迎える。

山形城は現在「霞城公園」となっているが、明治から昭和初期には陸軍の連隊が置かれており、城には改修の手が加えられていた。一九八六年に国史跡に指定されてから、史跡整備を目的とした発掘調査が行なわれてきた。

今回紹介する木簡は、本丸大手門の復元事業に関わる本丸堀の調査に伴って発見されたものである。出土地は、二の丸と本丸とをつなぐ本丸大手橋がかかる付近の本丸堀跡で、倒壊したと思われる橋脚の下から出土した。周辺は本丸堀の中でも特に深く掘削されており、この堀が機能していたと考えられる時期の砂質土が約二m堆積していた。標高は約一二四mを測り、現地表より約七m下がった場所である。また、周囲からは橋の部材である木材が多量に出土しているほか、少量ながら、カスガイ類などの金属製品や、ノミ・カナヅチなどの鉄製工具類、キセルなどが出土しており、木橋がかけ替えられたことが窺われる好資料と言える。

山形城の歴史に関しては史料に乏しく、特に城の改修・補修などについては不明な点が多い。本丸大手橋に関するかけ替えの記録は、安永四年（一七七五）と、寛政五年（一七九三）の二回みえるが、これらから木簡の年代を推定することは困難と思われる。

現在、本丸堀跡の発掘調査は継続しており、大手橋部分の遺構も約半分ほど未調査である。今後、木簡の残存部分の検出を期待しつ

つ調査を進行する予定である。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「田代鉄五郎

渡部磨右衛門

瀧山藤兵衛」

240×(130)×10 081

人名が三名列記してあるが、その端部で板材は破損しており、本来はさらに人名が列記してある横長の板材だった可能性が高い。また、板材には穿孔が一カ所みられるため、未発見の部分とあわせ懸架していた可能性も考えられ、木橋に直接関わる遺物と推測される。

(五十嵐貴久)



秋田市教育委員会発行

『秋田城出土文字資料集』Ⅲ の刊行

一九八四年度の第三九次調査から、一九九八年度の第七四次調査までに出土した墨書土器全九二〇点について、出土遺構や墨書銘などの詳細なデータを掲げると共に、実測図・写真を掲載する。また、一九九八年度の第七二次調査で出土した漆紙文書（総点数三四点以上）について、整理作業が終了した九点の釈文・内容について概要が記されている。

A4版 一六八頁 二〇〇〇年三月刊行

頒価三〇〇〇円（送料三八〇円）

申し込み先

秋田城跡調査事務所内 秋田城を語る友の会

〒〇一―〇九〇一 秋田市寺内字焼山五六

電話 〇一八―八四五―一八三七

FAX 〇一八―八四五―一三二八